九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

質的研究方法の可能性と限界性に関する覚書

朴, 玲河

https://doi.org/10.15017/1398563

出版情報:教育経営学研究紀要. 16, pp.43-48, 2013-09-30. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)教育経営学研究室/教育法制論研究室

バージョン: 権利関係:

質的研究方法の可能性と限界性に関する覚書

朴 玲河 (九州大学/大学院生)

I はじめに

Ⅱ 質的研究とは

Ⅲ 質的研究の方法と記述

IV 質的研究の可能性と限界性

Ⅴ おわりに

I はじめに

社会科学とは、対象となる社会を意味のある世界として捉え、その意味を探求し、新しい知見を提示するための科学である。ここで、意味のある世界とは、対象の社会に住んでいる人々によって構成され、そこに潜在する意味を見出し、又は、意味を付与することによって成り立つ世界である。そして、そのような営みを解釈ともいう。

それでは、どのようにすれば意義ある解釈を行えるのだろうか。そのためには、まず、①解釈を試みる「問い」そのものに普遍的に知る価値があることと、②その「問い」を探求していく過程において、解釈の基となるデータを適切な方法を用いて収集及び構成し、論述すること、が前提として求められる。

ところで、データを集めて眺める方法に関しては、様々な方法が紹介されている。その研究の方法を、データの値の性質によって分類すると、量的研究と質的研究に分類することができる。ここで、データの値を数量的に扱う研究を量的研究、そうでない方法(質的な方法)でデータの値を扱う研究を質的研究という。

一方、社会科学では、これら量的研究や質的研究の研究方法を巡って、それぞれの立場において様々な論争がなされている(G. キング 2004、H. E. ブレイディ 2008)。よって、お互いの方法を相互に比較してみることは、これらの研究方法を理解するのに最も意義があるといえよう。

本稿では、その中で、質的研究の方法について、 量的研究と比べ、その可能性と限界性に着目し考 察を行ってみた。以下の節では、その一端につい て述べる。

Ⅱ 質的研究とは

質的研究とは、一般に、質的データを用いて日常的な社会現象をできるだけありのままに記述し、解釈を試みるものと考えることができる。それでは、質的データは何を示すのだろうか。 表1に、記録の形による質的データの種類を示す。

表1 様々な質的データの種類

調査記録	 フィールドノート・メモ 調査票及び回答 コード化資料(カード、索引) 構造化・系譜化・時系列化資料(記号・図・表などの整理資料) 音声、写真、映像記録を起こしたもの
文献	 歴史資料:古文書など 行政資料:法規、議事録、会議録など 報道資料:新聞、雑誌など 文学作品:小説、詩、文芸批評や評論など 生活記録:日記、手紙など 学術資料:論文、学会など
音声・映像	・ 光磁気保存媒体(音声・写真・映像など)・ 放送・報道資料・ インターネット情報

このように、質的データとは、数値では表されない、統計処理では困難とするデータのほとんどが含まれるといえよう。

よって、質的研究では、扱うデータの形が多岐 にわたるので、どのようなデータと分析を用いる かを研究者自身が、研究の目的や問いと照らせ合 わせ、決めなければならない。次の節では、質的 研究で主に用いられているデータの獲得方法と記 述方法について紹介する。

Ⅲ 質的研究の方法と記述

1. データの獲得方法

質的研究においてデータを獲得する方法には、様々な方法を用いることができる。但し、その際に、研究に適するフィールドでデータを収集することと、獲得したデータは、収集の際やその後になるべくはやいうちにフィールド・ノート、カードなどに記録しておくことが求められる。以下には、データを獲得する方法を挙げておく。

(1) フィールドの設定

フィールドをどう設定するかは、何を研究すべきか、何を明らかにすべきか、という研究の目的や問いに強く依存している。よって、研究の目的や問いに照らせ合わせ、ふさわしいフィールドを決めなければならない。また、質的研究では、研究の対象と緊密に接する事が多い。よって、そのフィールドにおける対象とは、強い関係性と信頼を築くことが求められる。

(2) 参与観察

参与観察とは、研究対象である現象が起こっている現場の日常生活に入り込んで調査することである。質的研究で必ずしも参与観察が必要なのではないが、できるだけ現場を直接体験することは求められる。

(3) インフォーマント

インフォーマントとは、研究対象の社会において、自分のことだけでなく、その当該社会や集団について詳しい情報を提供することができる情報提供者を意味する。フィールド・ワークには、インフォーマントの存在が欠かせない場合が多い。

インフォーマントとしては、研究者が知りえない情報を教えてくれるだけでなく、当該社会の制度や文化について解説や説明又は解釈をも提供してくれる人が望ましい。

(4) インタビュー・調査票

インタビューは、社会調査の方法においてデータを収集するための最も基本的な方法である。なお、インタビュー項目は構造化して相互排他的に構成するのが望ましいが、質的研究においては、構造化の度合いは多少ゆるやかでもかまわない。

よって、ある程度に質問内容や順序が決められている半構造化インタビューから、前もっての枠組みがほとんどないもの、トピックスを絞って聞き取りを行う深層インタビューなど、その形式は多岐にわたる。必要に応じては、調査票を活用することもできる。

(5) 撮影・録音

観察対象の言葉や行動を記録する方法である。 対象の微妙なニュアンスや行動を読み取るために は、なるべく音声や映像記録を活用することが勧 められる。

(6) 構造的・系譜的・時系列的モデル化

フィールド・ワーク、文献、音声・映像記録から獲得したデータを、何らかの基準に沿って構造化、系譜化、時系列化し、記号・図・表などでモデル化することを意味する。情報の流れ、形、比較の枠組みを可視化するために用いられる。この作業は、ベースとなるデータを基にして加工されるものなので、その出来具合は、一次データの収集度合いに強く依存せざるをえない。

(7) コード化

文書やテキストから、多少とも抽象的な概念を 取り出すとき、データを分割してコード化を行う。 なお、分割は研究の目的に合わせ様々なレベル(単 語、文、節、段落、作品など)で施す事ができる。

2. データの記述方法(様々な質的研究)

上に示した方法により、データが収集されると、 研究の問いを明らかにできるよう、それらを論述 して行く必要がある。

一方、データの記述方法には、研究の対象(何についての研究か)、めざすもの(何をあきらかにしようとするのか)によって様々な質的研究の方法が提案されている。表2に、その先行例について、概略的な記述の方法、対象、めざすもの、を中心にまとめてみた。

表 2 様々な質的研究の先行例

手法	定義・記述方法	研究の対象	めざすもの
エスノグラフィー	・対象となる社会の環境、政治構造、経済活動、 親族関係、宗教など、そこで営まれる社記生活	全体社会、集団、コミュニティ	民族誌的構造の記述や、社会の特定化さ
(藤田結子 他 2013)	を、多方面にわたって包括的に記述 ・ 参与観察、インタビュー、録音・撮影 ・ 構造的・系譜的モデル化		れた構造、 日常性重視 ⁽¹⁾
学説研究 (寺崎 1981)	・ある学者や著者の思想やテキストの内容構造を 記述・抽象的な観念を探求・構造的・系譜的モデル化、コード化	哲学、思想、文献	観念体系、思想、作 品の構造
文芸批評・評論	・ 文学作品の思想、背景、構造、作者について記述・ 内在的意味を探求・ 構造的・系譜的モデル化、コード化	文学作品	観念体系、思想、作 品の構造
言説分析 (広田 2001)	・記述による言語使用、発話による言語使用、身振り手振りによる言語使用を分析・参与観察、インタビュー、録音・撮影・コード化	テキスト記述、言説、 会話、伝達行為	社会的相互作用の構 造 ⁽²⁾
カルチュラル・ スタディーズ (井口 2003)	・ 社会の基底に存在すると考えられる階級、差別、 権力の構造を探求 ・ 参与観察、インタビュー、録音・撮影 ・ 構造的・系譜的モデル化	文化やメディア	隠れた制度 ^③
エスノメソドロ ジー (秋葉 2004)	・人々が自明視しているけれども意識していない 了解構造、規範、権力の探求・参与観察、インタビュー、録音・撮影・構造的・系譜的モデル化	日常生活における会 話や相互行為	隠れた制度
ライフヒストリ ー (山田 2007)	対象となる人物の人生の全体ないしその一部を 語ってもらうようインタビューインタビュー、録音・撮影構造的・時系列的モデル化	個人	主観的に了解してい る世界 ⁽⁴⁾
ナラティブ (会 話) 分析 (木村 2010)	・ 談話やインタビュー等で得たデータを用い、時間的に限定された人生のプロセスを記述・ インタビュー、録音・撮影・ 構造的・時系列的モデル化	個人	主観的に了解している世界
グラウンデッ ド・セオリー (畑中 2012)	カテゴリー間に生成される現象のプロセスについてその動態的な構造を探求参与観察、インタビュー、コード化	組織・集団・団体	対象のメカニズム的構造と理論
内容分析 (田上 2011)	・テキストの内容を何らかにコード化し、統計分析を施すこと・コード化、統計分析(質的データを用いた量的研究としても分類が可能)	観察記録、報道資料、文献	観念体系、思想、作品の構造 社会的相互作用の構造

Ⅳ 質的研究の可能性と限界性

今まで、質的研究の概念や方法について簡略に述べてきた。以下では、これらを基に、①扱うデータと事例、②研究対象との係わり、③分析の枠組み、の観点から、量的研究と比較分析を行い、質的研究の可能性と限界性を導出してみた。

1. 可能性

(1) 単一事例や逸脱事例に研究の枠組みを提供しやすい

量的研究は、前提として正しいサンプリング、 対象が正規分布していると仮定するなど、その対 象の特性と数に制約を受けることが多い。

一方、質的研究は、これらの制約を受けない分析の枠組みを提供してくれるので、単一事例や逸 脱事例の研究に適していることが多い。

(2) 研究対象とより緊密に接することができる

量的研究では、調査票などの規格化された同じ物差しを用いてデータを計量的に扱うのが一般的である。よって、その研究対象との距離の保ち方としては、緊密性よりは代表性がきびしく問われている。このことは、しばしば研究対象の本質を見出す際に、制約として振る舞う恐れがあるといえよう。

しかし、質的研究では、参与観察、構造化されていないインタビューの活用、インフォーマントとの関係構築などにより、研究対象との距離を親密に保つことや相互に信頼関係を築けられる可能性が高い。よって、研究対象の何らかの本質を捉えようという試みに対しては、より多くの知見を提示することが可能であると考えられる。

(3) 研究対象の全体像を相互排他的⁽⁶⁾に構造化し やすい

量的研究では、多くの対象を測定可能な数量を 用いて扱う場合が多いので、問いの解釈をマクロ 的観点から試みることが多い。このことは、対象 を相互排他的に分割し眺めるのに2つの制約をも たらす。すなわち、①ある事象の数理的分割にお ける統計学的制約と、②マクロから眺める時の対 象との距離の制約である。 それに対して、質的研究では、量的研究と比べ、 研究の対象との距離や係わり方が緊密なので、その対象の全体像を漏れ無く相互排他的に構造化し やすいと考えることができる。また、数量化でき ないデータも扱うことができるので、統計的な相 互排他の原理による厳密性から逃れ、対象を構造 化するのに、定性的な知見を用いることが可能と なる。

(4) 質的データは、数量化されないものも扱うことができる

同じく、量的研究では、研究対象の特性について、何らかの測定可能な形で数量化又は計量化を施す必要がある。しかし、社会研究で扱うデータの多くには数量化しがたいものが多く存在するのが現状である。

そのようなものに対して、質的研究では、研究 対象の特性をありのままに表現するのに制約がゆ るやかである。その際、質的データは、主に、構 造化、系譜化、時系列化などを施すことにより可 視化され、解釈や分析の枠組みを提供する。

2. 限界性

(1) 統一された分析の枠組みを提供しにくい

質的研究には、表2に示したようにさまざまな枠組みが存在し、同じ枠組みにおいても研究者によって異なる形で用いられる場合が多い。このことは、分析ツールとしての共存の場を提供するのが容易でないことを示唆する。

これは、量的研究が、データを数量的、計量的に扱うことにより、統計学や数学などの共通の枠組みを研究に用いられること、とは対照的な部分でもある。

(2) 科学としての再現性(6)を確保しにくい

社会科学が、科学と述べるような揺るぎない地位を保つためには、再現性を有しなければならない。しかし、質的研究では、研究の対象が限られているし、かつ一時性を有することが多い。このことは、質的研究において、①再現性を確保するのが容易でないこと、②研究の結果が、研究者の解釈や倫理に強く依存せざるをえないこと、を意味する。

一方、量的研究では、数値からなるデータを規

格化されたツールで分析を施すので、その点において再現性の確保は有利であるといえよう。

しかし、量的研究でさえも解釈を試みるのは研究者であり、どの研究者に対しても同じ結果を得られるとはいいがたい部分が存在する。

(3) 研究対象の代表性⁽⁷⁾の確保が量的研究より曖昧になりやすい

研究が普遍的知見を見出すためには、前提として研究の調査対象が、その母集団を代表していなければならない。

質的研究では、かなり少ない対象と親密に関わらざるを得ないので、研究対象の代表性を如何に確保するかという問題から逃れるのは容易ではない。

一方、量的研究では、サンプリングという手法を用いることで、対象に計量的な代表性を付与することができる。また、サンプリングが困難な場合においても、多くのデータを扱うので、代表性の問題は多少ゆるやかになることが多い。

しかし、量的研究も、研究の対象となる母集団、 そのものは、研究者によって選定されるものである。このことは、質的研究と同じように、研究対象の選定に、研究者の主観的なものが介入せざるを得ないことを示唆する。よって、代表性を如何に確保するかという問題については、量的研究でも注意を払う必要が生じる。

(4) 仮説の検証において定量的知見を見出すのが難しい

社会科学は、「問い」を立て解釈を試みることから成り立つのだが、その際には、仮説を立てそれを検証することが求められる。また、仮説の検証する際に、特に命題的理論の構築においては、定量的知見を提示することが欠かせない。

しかし、質的研究では、仮説の検証は、構造化された枠組を用いて研究者の解釈により行われるのが一般的である。すなわち、仮説を見積もるのは、研究者の定性的な分析と解釈であるので、その検証の度合いを定量的に提示することはできないのが一般的であるといえよう。

反面、確かに量的研究では、仮説の検証に統計 を用いることが可能なので、その検証の度合いに ついて定量的知見を示すのは容易である。 しかしながら、仮説という予想されるモデル、 そのものの枠組みまでが定量的に求まるわけでないことは明らかである。すなわち、仮説の検証における定量的知見というのは、何らかの定性的知見により建てられたモデルの中において、その対象間の関係の度合いを定量的に見積もったもの、だということに気をつけなければならない。

以上、量的研究との比較分析から、質的研究には、様々な限界性を有することが導けた。しかし、 それらは質的研究だけでなく、量的研究において も同じく注意を払わなければならない要素である ことを示すことができた。

Ⅴ おわりに

社会科学の歴史を辿ってみると方法対立の歴史であるかもしれない。盛山(2012)が述べているように、方法上の対立は、社会的世界の本質を巡る存在論上の対立と科学的探求の意義を巡る認識論上の対立、そしてさらに、認識と実践を巡る哲学的な対立と密接に関連している。しかし、文頭でも述べたように、量的研究も質的研究も、社会を意味世界として捉え解釈を試みるという点では、両方の営みは同じものであるに違いない。つまり、データと方法は手段であるのであって、研究の目的そのものであるとはいえないのである。

結局、研究という営みに求められるのは、①常に研究の問いが普遍的に明らかにする価値があるものか疑問を持つこと、②研究の目的と、その問いにふさわしいデータと方法を用いること、ではないだろうか。

最後に、そのためには、社会を眺める枠組みである様々な方法について正しく理解して置くことが何より重要であると考えられる。なぜなら、方法を正しく理解することで、研究の論述において、その研究方法が有する限界性を明確にできるし、それらを補うための知見を見出すよう心掛けることができるからである。また、そこには、問いへの更なるひらめきが潜んでいるのかもしれない。

【註】

- (1) 自然な日常的な文脈の中で観測しうることをありのままに明らかにすることをめざす。
- (2) 人々の解釈過程を媒介にして成立している社会 の相互作用の構造を明らかにすることをめざす。
- (3) データの背後にあるより基底的な構造を明らかにすることをめざす。
- (4) 対象者が自分をとりまく世界をどのように理解 し、どのような意味を見出しているかを明らかに することをめざす。
- (5) 相互排他的とは、「相互に排他的な項目」による「完全な全体集合」を意味する言葉で、網羅性が 求められる要因・アイデアを漏れなく挙げつくし たい場面で使用。
- (6) 再現性とは、ある事象を成り立たせていると考えられる要素や要因に対して、それと同じ要素や要因を条件として整えた時に、再びまったく同じ事象が起こる性質をそなえていること。

つまり、再現可能な実験内容と手順に従って、 異なる実験から同じ結果が得られるのなら、実験 結果は妥当なものとされ、その事象は科学的再現 性があるとされる。

(7) 調査対象となる母集団から、ある方法により抽出された一部の対象者に調査を行った際に、調査結果が母集団全体を調査した時の結果を正確に反映しているかどうかのこと。

【参考文献】

- ・ G.キング 他(2004) 『社会科学のリサーチ・デザイン―定性的研究における科学的推論』 勁草書房
- ・ H.E.ブレイディ 他(2008) 『社会科学の方法論争 一多様な分析道具と共通の基準』勁草書房
- ・ 藤田結子 他(2013) 『現代エスノグラフィー: 新しいフィールド・ワークの理論と実践』新曜社
- · 寺崎昌男(1981)「日本近代教育学説史研究の方法 と意味」『教育学研究』第 48 巻 第 2 号、pp105-111
- ・ 広田照幸(2001) 『教育言説の歴史社会学』名古屋 大学出版会
- ・ 井口博充(2003) 『情報・メディア・教育の社会学 一カルチュラル・スタディーズしてみませんか?』 東信堂
- ・ 秋葉 昌樹(2004) 『教育の臨床エスノメソドロジ ー研究―保健室の構造・機能・意味』東洋館出版 社

- ・ 木村優(2010)「教師教育におけるナラティブと感情」『福井大学教育地域科学部紀要』、pp.197-209
- ・ 山田浩之(2007)「教育の市場化時代における教師 のライフヒストリー」、文部科学省科学研究費補助 金(基盤研究 C) 一般研究成果報告書
- ・ 畑中大路(2012) 「M-GTA を用いた学校経営分析 の可能性―ミドル・アップダウン・マネジメント を分析事例として―」『日本教育経営学会紀要』第 54号、pp.76-91
- ・ 田上哲(2011) 「授業研究におけるデータの様相的 処理に関する研究」『九州大学大学院教育学研究紀 要』第 14 号、pp.41-58
- ・ 盛山和夫(2012) 『社会調査法入門』有斐閣ブックス